

谷山市郷土史年表

年号	西暦	谷山市
建久三	一一九二	谷山草野貝塚
建久三	一一九二	平川遺跡(海之上部落)
建久三	一一九二	塔ノ原遺跡(五ヶ別府町)
建久三	一一九二	上ノ原遺跡(山田町上ノ原)
建久三	一一九二	三重野遺跡(五ヶ別府町)
建久三	一一九二	須々原遺跡(平川町須々原開拓地)
建久三	一一九二	坂ノ上遺跡(住居跡)
建久三	一一九二	薬師堂遺跡
建久三	一一九二	五位野遺跡このころ清泉寺、慈眼寺(目羅建立といわれる)
建久三	一一九二	延喜式民部に錦山、谷山、溪山郡とし谷山久佐の二郷を管す。和名抄には多仁也末と訓す。
建久三	一一九二	この頃刀工橋口正国(行安)波ノ平に住む紀伊国竹内兄弟の内次郎に谷山福本五十五町を与ふ。
建久三	一一九二	谷山郡、伊佐郡をとりあげ忠久地頭職となる山田文書この年にはじまり一六九〇年おわるこの間四九九年
建久三	一一九二	谷山郡二百町内社領一八町寄郡一八二町益山太郎
建久八	一一九七	
建仁二	一一〇二	谷山郡司信忠関東下文を受く
承久三	一一三一	谷山忠光六波羅状案権石中弁状により谷山郡請所とす
仁治元	一一四〇	谷山忠光地頭職請所となす(島津忠時地頭)
建長三	一一五一	島津忠時の子忠継が谷山のうち山田、上別府をもちらう(山田氏の祖)
文永二	一一七四	清泉寺摩崖仏彫らる
建治三	一一七七	谷山資忠(覚信) 將軍家新造御用途対掉す(三年)
弘安元	一一七八	島津久経谷山郡地頭土用熊丸に伊豆走湯山造営用途を上進せしむ
〃	一一七九	幕府土用熊丸の訴訟により、谷山郡司資忠に課役を怠らないように命ず
〃	一一八七	幕府谷山郡司地頭の相論裁決
元享二	一一三二	山田宗久谷山資忠を探題に訴う
正中二	一一三五	山田宗久諸三郎丸に谷山郡山田上別府村両村を譲る
建武元	一一三四	山田忠能谷山郷の山田上別府村の所務得分物の知行を決断所より認めらる
建武二	一一三五	谷山五郎入道隆信谷山郡司となる
建武二	一一三五	山田宗久、尊氏に味方す

延元二	一三三七	谷山隆信三条泰季に忠す 谷山隆信伊作庄に向い伊作久長等と戦う曾於 軍に入り三条泰季軍と共に橋木城攻撃	享祿四	一五三二	僧舜有舜田に従つて皇徳寺による
興国三	一三四二	征西將軍宮懷良親王谷山に来る 島津貞久谷山郡佐々野木原で官方と合戦谷山 城、波之平手落の合戦	天文三	一五三四	川上昌久勝久の臣末弘忠度を谷山皇徳寺にて 殺害す
興国四	一三四三	この頃諏訪神社建立	天文四	一五三五	川上昌久勝久に誅せらる
正平二	一三四七	谷山官軍勝利懷良親王海路より肥後へ、谷山 城は三条泰季おさむ	天文八	一五三九	勝久實久と谷山に戦つて帖佐へ敗走す 貴久に平田宗秀降る貴久公苦辛城にいる貴久 谷山を親征す
正平五	一三五〇	足利宣冬山田忠能を招致す（この頃島津氏は 官軍）	天文二	一五四二	慈眼寺貴久公改宗福昌寺末寺となる
文中三	一三七四	島津師久山田忠継のために谷山郡山田、上別 府の地頭職を乞う	天正一	一五七三	山例（山法書五十三ヶ条）発布せらる
元中元	一三八四	無外円照和尚により皇徳寺建立される	天正二	一五七四	川龍山は持宝院常楽寺この頃建立
応永一一	一四〇四	清泉寺字堂、覚正和尚により再興	天正五	一五七七	この頃錫山岩屋御仮屋建立
応永一四	一四一七	伊集院頼久、九代義天公（久豊）との合戦に より之を破り谷山城に入る川口城、陣ヶ岡、 神前城	天正一六	一五八八	島津義久頼娃三郎久音に山田村を与ふ
永享七	一四三五	谷山損宿のうち大慈寺正八幡宮領となる（島 津氏寄進）	文祿四	一五九五	皇徳寺に山本親匡の墓建立（義弘の子久保に 殉死す）
寛正四	一四六三	島津立久御佐山祭の夫役を鹿兒島谷山二十四 ヶ村に分つて七番しす	慶長二	一五九七	谷山辺田より朝鮮の役に出陣す
文明一七	一四八五	島津昌昌谷山にて困久忠廉と祁答院重度討伐 を議す	慶長三	一五九八	安張（寺庵）義弘に仕え朝鮮征伐に従い刀を つくり将士に与ふ
明応四	一四九五	島津昌忠吉田孝晴に谷山山田村を与ふ	慶長七	一六〇二	伊集院幸貞の小伝次は富隈、三男三郎四男千 次郎は谷山掛橋郷（滝ノ下で成敗母は阿多に て皆々同日成敗す）
永正九	一五一二	島津忠治種子島忠時に損宿軍谷山郡和田名等 を増封	元和九	一六二二	この頃青少年風儀みだれ郷中教育おこる
大永六	一五二六	島津忠良軍功により伊集院谷山の地を得る	寛永一九	一六四二	刀工橋口寿庵没
大永七	一五二七	島津実久谷山をとり平田宗秀に苦辛城を守ら	正保二	一六四五	島津大和守久章清泉寺境内で自害、墓建立さ る

す（山田）

明暦元	一六五五	八木主水元信により錫山開かる
寛文元	一六六一	谷山栗野財部一向宗門徒処分さる
寛文二	一六六二	金山へ他国領民を許さる
延宝二	一六七四	霧島六所権現皇徳寺に建立
延宝四	一六七六	大山祇神社建立
貞享元	一六八四	清泉寺金剛力士像彫らる
貞享二	一六八五	五ヶ別府町川口に森家の墓建立
元禄九	一六九六	三宝荒神建立(大川内)
元禄一三	二七〇〇	谷山錫山物定帳発布せらる
宝永一二	二七〇六	大川内妙楽寺(曹洞宗)建立 皇徳寺却外白明蔵司墓建立
正徳二	一七一二	久永仲兵衛大川内に献燈立つ
正徳五	一七一五	白山神社献燈立つ
享保二	一七二七	慈眼寺白峯和尚により磨崖月輪ほらる
享保六	一七三一	永田に田の神建立
享保八	一七三三	山田一丁田の神建立
享保一二	二七二七	慈眼寺石橋修理碑建立 慈眼寺大曇日峯十三世和尚再興
享保一六	一七三二	久永仲右衛門大川内に仏像建立
享保一七	一七三二	鹿倉に久永藤右藤門墓立つ
享保一九	一七三四	滝ノ下寺山に墓建つ
寛保三	一七四三	三重野に水神立つ
宝暦一	一七五二	皇徳寺堂元に墓立つ
宝暦四	一七五四	錫山立神山を採鉱す
宝暦七	一七五七	谷山大火町の半分焼失す
宝暦八	一七五八	大浦山帝釈寺良源和尚草駄天像再興す
宝暦一〇	一七六〇	西藩野史でさる
宝暦一一	一七六一	妙楽寺境内に六道地藏建立
安永三	一七七四	山田二十三夜待供養塔立つ
安永三	一七七四	錫山山中稽古所設立さる
安永六	一七七七	皇徳寺に永崎長蔵等により手洗鉢寄進さる
安永九	一七八〇	大川内妙楽寺一世僧侶墓立つ
天明三	一七八三	赤崎海門造士館教授となる
寛政六	一七九四	大川内に十八夜待二十三夜待供養塔立つ
寛政一二	二八〇〇	滝ノ下浦村中がらん神建立

享和二	一八〇二	島津国史でできる
享和三	一八〇三	金山御取建之由緒発布
文化四	一八〇七	立迫部落に石壇供養碑立つ
文化一〇	一八一三	大川内明楽寺に経塚立つ
文化一三	一八一六	錫山大山祇神社に献燈立つ
文化一四	一八一七	辺田に稲荷大明神建立 是枝柳右エ門生る
文政元	一八一八	森喜平太（小銃指南役）生る（川口）
文政二	一八一九	白山神社手洗鉢献立 小伝次墓立つ（滝ノ下） 秀頼の墓の献燈立つ
文政七	一八二四	金峰山講この頃から記録のこる（松崎町）
文政一〇	一八二七	山相秘録、坑場法律出版さる
文政一二	一八二九	沼田幸兵衛錫山へ来る、南蛮絞吹きはじめ
文政一二	一八二九	谷山諸記でさる
天保二	一八三一	小島利兵衛錫山で白炭焼をはじめ
天保五	一八三四	川畑文書（万覚書帳）この年はじまり一八七 六三年おわる。この間四十二年
天保六	一八三五	森喜平太長賢、谷山（川口）で小銃指南役と して足輕に教授す
天保七	一八三六	立迫石敢当立つ（海老原氏）
天保一〇	一八三九	谷山の永田橋汐見橋木ノ下橋この後架橋
天保一二	一八四一	日置家島津久風をして谷山海岸（塩屋）に洋 式砲術を評驗させる
天保一四	一八四三	三国名勝図会成る
弘化元	一八四四	林家の旧領地に林昌竟記念碑立つ（求頭石）
弘元四	一八四七	錫山山中総会所建つ
嘉永元	一八四八	是枝柳右衛門松崎塾をおこす（塾生百余名）
嘉永四	一八五一	谷山郷土小倉玄昌蘭学修業のため長州藩医青 木周弼の門に入る
嘉永五	一八五二	庚申講記録のこる（山田下）この頃盛
嘉永六	一八五三	錫山湧上坑発見島津氏の直営となる 滝の下弁天財天立つ 鹿倉水天つ郡奉行猿渡彦四郎 川上出右エ門 郷土年寄佐藤源太エ門 床屋山下民左エ門
安政元	一八五四	この頃川口辺田谷山麓に稽古所設けらる
安政六	一八五九	錫山十萬斤時代（この一年五ヶ月）
万延元	一八六〇	和田浜大火
文久三	一八六三	谷山郷土辺田土薩英戦争に参加す
文久三	一八六三	名越高朗日記（八ヶ年分）、他に耕作万覚書 できる
元治元	一八六四	川口稽古所漢学剣術を教える 地頭三原伝左エ門新任、有学の志士及児童を 地頭飯屋に召し経義を講し

元治元	一八六四	谷山善兵衛日記（三ヶ年間）できる	鹿兒島警察署の分署谷山に設置される
慶応元	一八六五	文武を奨励す	谷山小学校校舎落成する
慶応二	一八六六	辺田郷中武道稽古所を辺田字館とし徳化とする	谿山郡町村数九、戸長役場数五、上福元村戸長伊地知季治任命
慶応三	一八六七	壮士上京のため地頭仮屋字間所（稽古所）閉校	錫山簡易小学開校される
明治元	一八六八	錫山金山奉行を生産方とする、フランシス、コワニエ錫山鉱山調査	三月十五日の公文書に戸長築瀬新八とある（官選？）
明治二	一八六九	戊辰戦役従軍武運長久祈願のため辺田稲荷神社手洗鉢寄進	塩屋村字井桶の尻に塩田開拓着手
明治三	一八七〇	谷山地頭仮屋跡に立志館設置され生徒百余名	清谿字舎創立される
明治四	一八七二	谷山常備隊解散の軍資金をもって郷校を再興	是枝千亀の墓立つ（小松原）
明治五	一八七三	戸長大脇為政任命さる	伊地知季治戸長に任命される
明治六	一八七四	平民の郷校入学を許す平田宗質郷校教授となり洋学を教える	谷山海岸にいたや貝の養殖はじむ
明治七	一八七五	川口小学設立す	慈眼寺軍馬育成所開設される
明治八	一八七六	谷山十五郷校正則小学校（谷山小学校）となり女生徒はじめて入学す（二十余名）	錫山山中二才組おこる
明治九	一八七七	私立学校徒谷山小学校を弾丸製造所にて三棟全焼す	辺田字館再興、夜学校はじまる
明治一〇	一八七八	辺田字館を第四大隊区三小区辺田字校と称す	慈眼寺公園修築、共楽園建築
明治一一	一八七九	谷山郡区第一小区―第五小区まで	大川内明楽寺の寺号認可される
明治一二	一八八〇	谷山郡区長山内賢助、副区長松崎平蔵任命される	谷山小学校を分離し、谿山、森山小学校とする
明治一三	一八八一	西南の役に谷山より多数従軍する	る、生徒六百余名、兩校に永田小、松崎小、宮本小の三校を合一する
明治一四	一八八二	谷山市街地全焼	中塩屋競馬はじまる
明治一五	一八八三	谷山小学校全焼一時閉校	谷山初代村長伊地知季治、助役伊集院剣才、村会議員選出される
明治一六	一八八四	コレラ流行死者甚大	和田千拓民間人にて工事着手さる
明治一七	一八八五	村校おこり教育普及する	伊作、知覧県道開通する
明治一八	一八八六		宮川小学校創立される
明治一九	一八八七		谷山においても吏覚、民党の争激し
明治二〇	一八八八		
明治二一	一八八九		
明治二二	一八九〇		
明治二三	一八九一		
明治二四	一八九二		

明治二七	一八九四	第二回国会議員選挙、厚地敏当選	大正六	一九一七	発動船建造、乗組員谷山漁民多し
明治三〇	一八九七	福平小学校創立される	大正七	一九一八	谷山小高等科に農業科を設置する
明治三三	一九〇〇	谷山消防組組織される	大正八	一九一九	慈眼寺大久保道路完成する
明治三三	一九〇〇	農会設立される			谷山小高等科に女子実業補習学校併設される
明治三三	一九〇〇	二代村長佐藤清真、助役山下正となる			谷山丸、東進丸の二隻進水する
明治三三	一九〇〇	この頃各地に馬頭神立つ			川畑半兵衛清真の記念碑、辺田に建立される
明治三三	一九〇〇	長太郎焼永田川河畔に創業す			和山町の漁業最盛となる
明治三三	一九〇〇	薩隅日地理算考できる	大正一一	一九二二	和山町制を施行(九月一日)し第一代町長に
明治三三	一九〇〇	平川小学校創立される			英国皇太子殿下歓迎記念碑鎮守神社境内に建
明治三六	一九〇三	松崎青年舎(松青学舎)創立される			立される
明治三六	一九〇三	松崎小学校森山小学校より分校創立される			第四代谷山村長に松元仁市郎氏選出される
明治三七	一九〇四	初めて鹿児島、谷山間に乗合自動車営業を開始する	大正一三	一九二四	(六月)
明治三九	一九〇六	慈眼寺軍馬育成所閉鎖される			谷山町制を施行(九月一日)し第一代町長に
明治四一	一九〇八	羽月市次郎氏はじめて温州みかん園開園	大正一四	一九二五	松元仁市郎なる、助役相良八郎太
明治四二	一九〇九	鹿児島郡立工業徒弟学校設立さる	大正一五	一九二六	谷山上松崎大火により商店多く炎上す
明治四二	一九〇九	第三代谷山村長に佐藤清光なる			谷山中央地区耕地整理に着工する
明治四二	一九〇九	谷山小高科三カ年に延長す	昭和二	一九二七	
明治四四	一九一一	火の河原分校創立さる			前田為信助役となる
大正元	一九一二	水稲作付正条植普及する	昭和三	一九二八	硫酸アンモニア始めて使用される
大正元	一九一二	谷山、森山両校舎を併給谷山男子校及び女子校となる			女子実業補習学校を谷山実践女子校と改称す
大正二	一九一三	鹿児島市武之橋、谷山間に電車開通する	昭和四	一九二九	谷山小奉安殿竣工する
大正四	一九一五	東上福産業組合創立される	昭和五	一九三〇	谷山神社創建される
大正五	一九一六	明治十年戦役記念碑慈眼寺公園に建立される			谷山隆信特旨を以て「贈正五位」に叙せらる
大正五	一九一六	錫山婦人会発足			谷山中央地区耕地整理完了する
					慈眼寺公園修営大工事完了する
					指宿線西駅五位野間開通する

昭和六	一九三二	和田千拓竣工する(六十三町工費三十六万三千円)	昭和二二	一九四六	二回の台風により農作物の被害甚大
昭和七	一九三二	坂之上無線自信所開設される	昭和二二	一九四七	選挙管理委員会生まれる
昭和八	一九三三	谷山小講堂落成(四一五坪五合)	昭和二二	一九四七	町全の国民学校小学校となる
昭和八	一九三三	錫山産業組合成る初代組合長有馬壯吉	昭和二二	一九四七	谷山町立第一中学校第四中学校発足する
昭和九	一九三四	大崎県道(鹿児島加世田市大崎間)着工(錫山経由)	昭和二二	一九四七	和田錫山に公民館設立される錫山館長三原清麿(四二年現在)
昭和九	一九三五	陸稲收穫皆無、水稲大減収	昭和二二	一九四七	安楽正矩第二助役に就任する
昭和一〇	一九三五	木原貞恒助役に就任する	昭和二三	一九四八	第一次農地買収はじまる
昭和一一	一九三七	この頃農家戸数五五三三戸	昭和二三	一九四八	谷山自治警察署となる
昭和一二	一九三七	第二代町長に伊地知栄二当選する	昭和二三	一九四八	法制改革により、谷山町農業協同組合となる
昭和一二	一九三七	錫山郵便取扱所、同十五年局昇進初代局長	昭和二三	一九四八	よりて錫山支所発足錫山支所長沼田義行(四二年現在)
昭和一二	一九三八	谷山資道、現代局長植木澄則	昭和二三	一九四八	谷山小学校四〇教室焼失する
昭和一三	一九三八	農林省家畜試験場開設される	昭和二三	一九四八	谷山火災により町役場新生工業跡へ移転する
昭和一四	一九三九	谷山公益質屋開設される	昭和二四	一九四九	谷山町立谷山高等学校発足する(定時制)
昭和一四	一九三九	錦江療院平川に開設される	昭和二四	一九四九	谷山町立第一中学校第四中学校の校名変更により、谷山、和田、谷山北、福平中学校となる
昭和一六	一九四一	第三代町長に伊地知四郎当選する	昭和二五	一九五〇	谷山町役場田辺より煙草収納所へ移転する
昭和一八	一九四三	入佐清之丞第二助役に就任する	昭和二五	一九五〇	農地委員選挙行なわれる
昭和一八	一九四三	産業組合法改正により谷山町農業会錫山支部発足	昭和二五	一九五〇	谷山小学校校舎二階四五〇坪竣工
昭和二〇	一九四五	空襲により市街地中心部焼失す	昭和二五	一九五〇	谷山町役場新庁舎竣工(十一月)
昭和二〇	一九四五	錫山、岩屋地区、同廿二年全地域点灯枕崎台風により和田千拓護岸決壊する	昭和二五	一九五〇	愛の聖母園新生工業跡に開園(十一月)
昭和二二	一九四六		昭和二六	一九五一	ラサール高等学校開校する
			昭和二六	一九五一	和田千拓護岸補修工事完了する
			昭和二六	一九五一	町内葉煙草生産高六万七千疋となる
			昭和二六	一九五一	水道工事着工(四月)

昭和二七	一九五二	谷山商工会設立される	昭和三七	一九六二	ボーリングにより永田川下流に温泉湧く
昭和二九	一九五四	豪雨により農作物被害甚大 水道給水開始さる(四月)	昭和三八	一九六三	谷山福祉会館竣工する
昭和二九	一九五四	鹿兒島市合併問題について公聴会開かれる 入役となる	昭和三九	一九六四	谷山消防署竣工する
昭和二九	一九五四	谷山高等学校創立に移管される	昭和四〇	一九六五	谷山市街地道路拡張工事完成する
昭和二九	一九五四	谷山町役場錫山出張所開設さる	昭和四一	一九六六	谷山鹿兒島合併協議会発足する
昭和二九	一九五四	沼田政治(四二年現在)	昭和四二	一九六六	鹿兒島工業短期大学開学
昭和三〇	一九五五	谷山町はじめてメーデーのデモストレーション行われる	昭和四二	一九六六	谷山市議会合併を議決する(六月二十三日)
昭和三一	一九五六	八木元信神社建立(発見三百年祭)錫山中学 校として独立	昭和四二	一九六六	谷山森林組合成る
昭和三一	一九五六	永田川改修工事着手される	昭和四二	一九六六	鹿兒島経済大学笠松に移転
昭和三一	一九五六	護国神社慈眼寺に竣工する	昭和四二	一九六六	鹿兒島市議会合併を議決する(六月二十九日)
昭和三一	一九五六	桑鶴実町長に当選する(第二期)	昭和四二	一九六六	谷山市議会議決する(六月二十九日)
昭和三二	一九五七	十月谷山市制施行される	昭和四二	一九六六	鹿兒島市となる
昭和三三	一九五八	明治三十四年以來の大雪降る	昭和四二	一九六七	四月二十九日鹿兒島市と合併(地名は谷山も鹿兒島市となる)
昭和三四	一九五九	川元浩市長に当選する			

## 編集後記

二二五四

昭和三十四年に、同好の人々が谷山史談会を組織して、毎月例会をもっていたが、だんだん成果を挙げるうちに、まとまった郷土誌編纂への希望も、醸成したのであります。幸にも川元市長の熱意と御理解により、市の事業としてとり上げられ、編纂委員を委嘱して教育委員会の所管とし、昭和三十八年五月に谷山市郷土誌編纂の発足を見たのであります。

そこで、編纂委員会では、まず資料を集収、整理、研究することとして

- 1 著名な資料文献から、谷山関係の分を抽出整理する。
- 2 個人所蔵の未公開の資料の探究に努める。
- 3 市内散在の遺跡、遺物の発掘、整理、保存に努める。
- 4 全市を区分して、協力委員を委嘱して徹底を図る。
- 5 右の地区別毎に、実地踏査や、古老との懇談会などにより探訪に努める。
- 6 他市町村、或は他県でも、関係資料を探究する。
- 7 市内の有形無形の資料に、馴れ過ぎて、取り落しのないよう他郷の人の注意を尊重する。

以上のような事項に留意して、まず資料や文献の調査、集収を始めましたが、谷山市は遺蹟は多く存在するのに反し、文献上の資料に乏しくその集収は極めて、困難であったので、市内の有識者を郷土誌編纂協力員に委嘱して、資

料や情報などの提供、またはあつせんについて、協力を求めました。幸いにこの協力員のご尽力により市内五カ所において、古老に聞く会を催し、また現地案内などに積極的に御協力いただいたのであります。

編纂委員はさらに出水、知覧、川辺、吹上、高山、垂水、金峰町などをはじめ、遠く熊本県八代市、菊池市方面にまで出向いて、文献の調査や実地踏査に当たったのであります。編纂に当りましては、各委員においてそれぞれ担当科目を決めて、毎月定例日に集合して協議を重ね、一方鹿児島大学の五味先生、桃園先生、原口先生、大庭先生を始め、高校史学会の村野先生や芳先生について、編纂の指導と助言をいただいたのであります。

元来、郷土誌の編纂は永い年月を要するのが普通であります。本市の郷土誌は鹿児島市との合併時期の関係がありまして、わずか四年にして上梓せざるを得なかつたのであります。従つてこの間、編纂委員においては非常な苦心を払い、貴重な文献や資料など急いで数多く集収する事に努力したのであります。特に、谷山諸記、山田文書、辺田文書、鶴田文書、名越高朗日記、前田善兵衛日記など得難い古文書や文献を発見して、これを取り入れることができ、これは大きな収穫でありました。これによつて、本誌が従来郷土誌に比して内容も記事も分量も著しく豊富になつたことは、ご覧の通りであります。

ここで少しお断わりすることは、内容はすべて委員共同の文責とし、用語や文体については、あらかじめ申し合わせ、さらに国語の先生方に依頼して現代かな使いに改めていただいたのであります。それでも文体や用語については必ずしも一様を欠くものがあり、この点に読者諸氏のご了承を願ひたいのであります。

なおここで誌しておきたいことは、本誌が完全無欠のものではなく、他日に補遺しなければならない部分も相当に

あると思われることでもあります。よって、今後とも資料の集取や研究を続けなければならない必要もあると思われるます。またここで述べておきたいことは、集取した文献や資料は全部これを本誌に収録したではありませんので、これらの文献や資料は永久に市に保管することになっています。

最後に、本誌の編纂に当って指導と助言をたまわった大学などの諸先生方と、文献や資料を提供して下さった方々、ならびに編纂に協力して下さった左記の協力員の皆様に、深甚なる感謝の意を表します。

編纂協力員（順序不同）

鬼丸静彦	東 晃永	松山英徳	有村精一	蕨野光盛	谷口 魁	有山長太郎
浜田長文	黒木弥之進	青木直敏	大脇為明	宮原 吉	名越高業	川畑正治
伊地知南男	伊集院 宏	蔵之下 繁	鶴田明孝	大迫敬治	高木良雄	西村 孝
島津久敬	以上					

編集事務担当者

上山芳徳（社会教育課長）      崎山九平（社会教育係長）      中野君江（囑託）      馬場口ミチ子（囑託）

谷山市誌編集委員



安田敬藏  
 明治二十八年六月三日生  
 近世史 宗教史



築地健吉  
 明治二十七年五月二五日生



矢上吉久  
 明治二十三年三月一日生  
 錫山鉦山史  
 林業史  
 名勝旧蹟、觀光編



入佐清之丞  
 明治十七年十月二十二日生



河野治雄  
 大正八年六月十八日生  
 先史 古代 中世史



木原三郎  
 大正八年一月十一日生  
 教育史 民俗



平井政明  
 明治三十六年十二月二日生  
 委員長(谷山市教育長)



黒木弥千代  
 明治二十八年七月五日生  
 行政史 産業經濟史  
 交通史 人物史

谷山市誌

昭和四十二年三月十五日 印刷

昭和四十二年三月三十日 発行

発行者 谷山市長 川元 浩

編集者 谷山市誌編纂委員会

発行所 谷山市役所

印刷所 鹿児島市西千石町一の八

合名  
会社 文尚堂印刷所



